

小林多喜二『蟹工船』初版本展示

11月2日～11月29日 於：新座図書館

小林多喜二は、1933年2月20日赤坂街頭で検挙され同日29歳で拷問死しました。その虐殺はロマン＝ロラン、魯迅をはじめ内外の文学者・団体から抗議を受けましたが、その後、日本の行き過ぎた国家主義、軍国主義化に歯止めがかかるとはありませんでした。

没後75年の2008年小林多喜二の『蟹工船』（新潮文庫）は、古典としては異例の40万部を越す売り上げとなりました。その背景には、就職氷河期世代の非正規雇用の増大があると言われ、今日の若者にも通じる部分があると言われています。立教大学図書館大久保文庫所蔵の、発禁となった『蟹工船』の初版と改訂版、また『30分で読める大学生のためのマンガ蟹工船』、『私たちはいかに蟹工船を読んだか』（エッセーコンテスト入賞作品集）などを展示・公開致します。

「現代に生きる蟹工船」

香山リカ 立教大学現代心理学部教授（精神科医）



9月16日から18日までイギリス・オックスフォード大学において行われた「小林多喜二記念シンポジウム」に参加してきた。

イギリス、アメリカ、そして日本の研究者が組織委員会として準備を進め、多喜二の母校である小樽商科大学と白樺文学館多喜二ライブラリーの後援を得て行われたこのシンポジウムには、日本のみならず欧米、アジアからも多数の研究者が参加した。

古い歴史を持つキープル校のホールで行われた開会式は100名近い各国からの参加者の熱気であふれ、主催者が「今年になり日本は、若者を中心とした突然の多喜二ブーム、『蟹工船』ブームにわいています」とあいさつをすると、大きな拍手が起きた。

私自身は専門が精神医学ということで、海外の研究者から「なぜ精神科医が多喜二研究を？」「なぜ若者が多喜二ファンに？」といった質問を受けた。

私が拙い英語で、いまの日本の若者が置かれている苛酷な労働状況と心理状況について説明し、「現代の若者は『蟹工船』を過去の作品としては読んでいない。まさに自分たちのことを描いたリアルな作品と思っている」と話すと、彼らは真剣な顔で大きくうなずいていた。各国の研究者たちも、世界の緊張が高まる中で、いま多喜二を改めて読み直すことの価値を強く感じているのだ。

現代の若者たちはどういう思いでこの本を手にして、どう読んだのだろうか。「これこそ自分の物語！」と共感した学生もいたのだろうか。一冊の本を手がかりに、はるか過去の世界と身近にある世界をダイレクトにつなげる体験ができれば、これほどすてきなことはない。

<展示資料>

小林多喜二『蟹工船』戦旗社 1929.9（初版、発禁本）

小林多喜二『蟹工船』改訂版 1929.11（定本日本プロレタリア作家叢書 第2篇）（発禁本）

『30分で読める大学生のためのマンガ蟹工船』（白樺文学館多喜二ライブラリー 東銀座出版社 2006）

『私たちはいかに蟹工船を読んだか』（白樺文学館多喜二ライブラリー 遊行社 2008）

『新潮日本文学アルバム 28：小林多喜二』（新潮社 1985）

『赤旗』122号 1933年2月28日（小林多喜二文学館：初版本による複製全集 ほるぷ出版 1980）など